

30°Nから上陸時までの間で幾分浅くなる傾向はあるが、1、2の例外を除いて変化は比較的小さい。これは30°Nに近い九州南部上陸の台風がかなりあることにも関係しているかもしれない。一方この図では30°Nから上陸までの発達衰弱傾向は30°Nに到達するまでの発達衰弱傾向と関係が少なく外挿により変化を予想することの困難性を示している。従って特別な温度場がないかぎり30°N付近の台風は、そのまゝの勢力で上陸点に到達するものと考えておくのが实际的であろう。

上陸点の取り扱い方で上陸気圧は衰弱前の気圧になる様な方向に統計してあるので、このような使い方には好都合であり、こゝに提出した予想図は30°N付近の状態で利用できるはずである。

8. 結 語

台風が本土に接近してからの勢力変化には色々な問題があるが、最も大きな要素は陸地を通過することによる

衰弱である。この衰弱の仕方は台風構造と通過地域の地形によってきままるはずであり、これをできるだけ簡単で有効な方法で処理することを理想として、統計的な調査を行なってみた。

(1) 台風構造は中心気圧と990mb等圧線の直径を以て表わすことが妥当であることが解ったので、これを基本条件とした。

(2) 上陸後の経路については、広範囲な地形差は影響が小さく、中心位置の局地的差が主な影響となる様にみられたので、海岸や内海通過の際に簡単な海上補正を行なった。また上陸時などには観測誤差の影響が小さくなる様に努めた。

(3) 以上の様な操作により、陸地通過時間に対応する中心気圧の変化を統計した結果かなりよい関係が得られたので、この標準値をそのまま予想値とすることにし図示した。

気 象 界 消 息

1. 土屋氏シンガポールに出張

気象大学校の土屋瑞樹教官は、6月20日から10月1日まで、スクリップス海洋研究所の観測船アゴ号に便乗して、海洋観測をするため、インド洋赤道海域およびシンガポールに出張された。

2. 北岡氏ヨーロッパ、インドに出張

北岡竜海高層課長は、8月18日から9月6日まで、「成層圏および中間圏の大気循環に関する国際シンポジウム」に出席ならびにWMO事務局、インド気象局において業務打合わせのため、ドイツのベルリン大学、スイス、インドに出張された。

3. 増沢氏米国に留学

気象庁海洋課の増沢謙太郎調査官は、9月20日から来年7月19日まで、「海況変動の研究」のため合州国のジョン・ホプキンス大学に留学される。

4. 寺田氏ヨーロッパ、インドに出張

寺田一彦海洋気象部長は、9月17日から10月5日まで、「IOC海洋学委員会第2回会議」に出席およびオランダ、スイス、インドにおいて海上気象業務について打合わせのため出張される。

5. 水野氏 WMO 事務局員となる

気象庁の水野精一郎国際係長は、WMO（世界気象機関）の事務局員となり、9月日頃羽田を立ち、ジュネーブに向われる。

6. 第9号台風北海道を通過

第9号台風は7月29日沖の鳥島の西方約400kmに発

生、沖縄の南を通り東支那海を北上し、朝鮮のソウル（京城）付近に上陸、日本海を通過したのち、渡島半島および襟裳岬の北を通過した。中心の最低気圧は968mbに達したが、渡島半島通過時は約990mbで、通過後温帯低気圧となった。

北海道では死者20名以上を出し、35,000戸以上が被害を受けた。

7. 第10号台風北海道を通過

第10号台風（Opal）は7月30日トラック島付近で発生、10月2日ヤップ島の北で発達して台風となり、北西に進んで6日台湾を通り、大陸に上陸、その後転向して朝鮮を通って、10日北海道北部を通過した。北海道上陸前は934mb、通過後温帯低気圧となった。

8. 第13号台風九州に上陸

第13号台風（Sarah）は8月14日台湾東方海上でタイロスに発見されてから翌15日に台風となり、台湾の東でゆっくりとループを描いたのち、19日に北上を始め、21日夜半九州に上陸、熱低となって本州を縦断したのち、23日宮古付近で温帯低気圧となって太平洋に抜けた。

9. 第14号台風本州に上陸

第14号台風（Thelma）は8月21日サイパンのの北で台風となり、北西に進み、24日父島の西方500km位で、北に進路を変え、27日紀伊半島東岸に上陸、本州を横断して日本海に抜けたのち東北東に向きを変え、27日温帯低気圧となって津軽海峡を通過して太平洋に出た。